

中日辞典の用例を考える

顧明耀

要旨 用等距抽样(5部)和随机抽样(5部)的方法,对日本出版的中日词典(有的叫《中国语词典》)的例证作了调查,结合日常使用中积累的资料(含中国出版的汉日词典4部),将笔者认为有待商榷的地方,从例证的针对性、例证的目的性、例证的有效性、例证的规范性、例证译文的正确性五个方面作了分类整理。并参考先贤研究,提出汉日词典编纂中的举例原则,以期这些意见对汉日词典的编纂有所补益,对汉日词典的使用者可资参考。

キーワード 中日辞典 用例

1. 前置き

1.1 本研究を行う契機

外国語教育(中国では日本語を、日本では中国語を教える)に携わってから、約50年も過ぎた。おおよそ30年前から学習者の辞書使用に関心を持つようになった。私の関心を引き起こすことはいくつもあるが、その一つは、用例を読まない、ないし用例を完全に無視することが挙げられる。当然、これは辞書の用例についての学生たちの認識不足、辞書使用の未熟さなどによるものだと言わざるを得ない。しかし、それだけなのだろうか、辞書編纂の側には全く問題がないのだろうかと考えるようになった。

辞書の用例のことを意識的に考え始めたのは十数年前からである。次第に学習者が用例を無視するのは、学習者側だけの問題ではないというのがわ

かってきた。例えば、用例自体が辞書使用者、中国語（あるいは日本語）学習者の立場に立って挙げられたものかどうか、学習者の勉強・応用に役立つものかどうか、辞書使用者の興味を引き付けられるものかどうかなどの点を考慮すれば、検討すべきところが多くあると言える。

1.2 本研究の実施方法

普段私が辞書を使う際にも、もう少し検討してほしいと思う用例に出会うことがある。その全てのメモを取っている訳でもなく、その量もさほど多くはない。少しでも全面的にこのことを考えるため、等間隔サンプリングの方法（50ページごとに4ページ）で5冊の辞書、無作為サンプリングの方法（ランダムで50～100ページ）で5冊の辞書の用例を調べてみた。この10冊の辞書は、全て日本で出版されたものである。

1.3 本研究の使用辞書

本研究を行うにあたって、次の辞書を調査対象とした。

- 1 中国語辞典（大学書林 1960年第一版）
- 2 熊野中国語大辞典（三省堂 1985年7月新装版第一刷）
- 3 標準中国語辞典（白帝社 1991年5月初版）
- 4 中日大辞典増訂第二版（大修館書店 1992年4月）
- 5 講談社中日辞典（講談社 1998年11月）
- 6 白水社中国語辞典（白水社 2002年2月）
- 7 初めての中国語学習辞典（朝日出版社 2002年2月初版）
- 8 中日辞典（小学館 2003年1月第二版）
- 9 東方中国語辞典（東方書店 2004年4月初版）
- 10 超級クラウン中日辞典（三省堂 2008年2月）

本研究の調査対象にはしていないが、日常辞書を引く際、気がついた用例も本研究に取り入れた。それは、主に次のものである。

- 1 漢日词典（吉林人民出版社 1982年2月第一版）
- 2 簡明漢日词典（商务印书馆 1985年1月第一版）

- 3 明解中日常用辞典（燎原 1986年5月初版）
- 4 現代日汉日词典（外语教学与研究出版社 1991年9月第一版）
- 5 中日日中學習辞典（中国文化出版センター 1998年4月初版）
- 6 实用汉日词典（北京出版社 2001年3月第一版）
- 7 クラウン中日辞典（三省堂 2002年3月）
- 8 中日大辞典第三版（大修館書店 2010年4月）

上記に挙げたように、相当古い辞書も含まれる。また既に第二版、第三版まで出されているが本研究の調査には初版を用いたものもある。もしかすると、本研究で挙げたあまり適切でない用例は既に修正されているかもしれない。具体的な辞書にとっては、その編纂（改訂）過程を顧みていない点がか確かにあると認める。一方、本研究では、個別辞書の問題を指摘するつもりは全くなく、辞書編纂史上には、こういった事例があり、解決の方法を探求して、より良い辞書の編纂に参考意見を提供したいということを研究目的とするため、その他不備に関してはご容赦いただきたく思う。

本研究を行う中で、最もよく参考にした、中国出版の辞書は次のものである。

《現代汉语词典》（第五版 2005.6、第六版 2012.6。以下略して《現漢》とする。二者の記述が異なる場合、“現漢5”“現漢6”で表す）

《現代汉语规范词典》（2004.1、第二版 2010.5。以下略して《规范》とする。二者の記述が異なる場合、“规范1”“规范2”で表す）

《应用汉语词典》（2000.1。以下略して《应用》とする）

1.4 本研究の調査対象

一言で用例といっても、言語単位から考えると、語もあれば、連語もある、また文もあれば、連文もある。本研究ではこういう差異を無視して、全て用例として取り扱う。

また用例の作成から見て、典籍引用例、調査資料例、加工例（典籍引用例や調査資料例を加工したもの）、自作例などと分類することができるが、本

研究では作成の方法については問わないことにする。

2. 誰のための用例か——検討してほしいところ1

本研究では、検討してほしい用例を集めて分類してみた。各用例の後ろに掲載ページを明記しているが、出所の辞典名は省略することにする。

2.1 日本人のためか中国人のためか

同じく中日辞典ではあるが、中国人のためのものと日本人のためのものは随分異なっている。一般的には、中国人のためのものなら、調べた語をどのように日本語に訳すかに最も重点を置かなければならないが、日本人のためのものなら、調べた語をどう正確に理解するかを第一の目的としなければならない。しかし、すべてがこの違いを重要視しているとは言えない。たとえば、

【座】①座席（ざせき）席（せき）（例略） ②座（ざ）台（だい）（例略）
③星座（せいざ） ④（量）固定（こてい）したものを数（かぞ）える単位（たんい）。（例略）（p. 878）

【沉鱼落雁】みめ麗（うるわ）しい形容（けいよう）。（p. 93）

以上2例は中国出版のある中日辞典から引用したものである。日本語の漢字については、全部括弧の中に振り仮名が付けてある。この点から見れば、この辞書は中国人のためのものだと思われるが、第一例の④の説明は通常このような辞書を引く中国人にとっては全く必要がないだろう。第二例の語釈は、この言葉の意味を理解したい日本人にとっては役立つが、どのようにこの語を日本語に訳してよいかという目的で辞書を引く中国人には全然役に立たない。そのため、この辞書は中国人のためのものか、日本人のためのものか、はっきりしていないところがあると思われる。同じようなことは用例のところにも見られる。

例1 【迎风】五星紅旗～飄揚／五星紅旗が風にはためいている。（p. 1551）

この用例訳文の「五星」も「五星紅旗」も『新明解国語辞典』『小学館日

本語辞典』『岩波国語辞典』『三省堂国語辞典』『三省堂現代新国語辞典』『明治書院精選国語辞典』などには収録されていない。五星紅旗とはどんなものか、日本人なら必ずしも誰でも知っているとは限らないだろう。この用例は《应用》によるものかもしれない。実はこれは中国の“歌唱祖国”（作者王莘，1950年）という歌の最初の一文であり、中国人なら、義務教育を受けているかどうかに関係なく、誰もがこの歌を歌え、この文のイメージがすぐに頭に浮かんでくるに違いない。中国人のための辞書なら、この用例は適切だと思うが、日本人のための辞書なら、むしろ直したほうがよい。さもなければ、中国国旗と訳したほうがわかりやすいはずである。

例2 【舍身】[動] 英雄董存瑞～炸碉堡／英雄の董存瑞は身を捨ててトーチカを爆発した。(p.1152)

董存瑞という人は誰か、50代以上の中国人なら皆知っていると思うが、若い人なら知らない人が多いであろう。数年前四川省中江県（董存瑞の故里）を訪れた際、ハイヤー運転手（20代）に聞いたところその名を知らなかったのである。中国人でさえ誰でも知っている人物ではないのに、その名を用例に入れることは少し検討すべきではないかと思う。また、日本人の場合、たとえ10年中国語を習っていても、“舍身炸碉堡”のような言葉と接する機会は滅多にないだろう。

例3 【通途】[名] 一桥飞架南北、天堑变～。(p.1301)

これは毛沢東氏「水調歌頭 游泳」詞の一文で、《現漢》《規範》《应用》のどれもがこの用例を挙げている。この詞は、多くの中国人が暗誦できるばかりでなく、長年にわたって小学校の国語教科書に本文として採用されているものでもある。中国人のための辞書なら、この語を収録しこの用例を挙げることは考えられるが、日本人の中国語学習者にはそもそも必要かどうか、もう少し検討してほしいと思う。

2.2 学習者のためか学者・研究者のためか

国語辞典のことを考えてみよう。小学生のためのもの、中学生のためのものもあれば、高校生・社会一般人のためのものもある。これと同じく、中日

辞典も使用者によって違うはずである。使用者を明確にしていないことが問題ではないかと思う。

例4 【孚】小信未～。(p.402)

“孚”という語は書面語で、学習者のための辞書では収録しなければならないものとは決して言えない。この用例は、初心者どころか、中上級の学習者にとっても難しすぎると思われる。

例5 【狭】褊～。(p.1401)

この用例はもっと難しく、普段使わないものである。“褊狭”という語は、《現漢》には見出し語として収録されているものの、《应用》《规范》には共に見出し語としても収録されておらず、用例としても挙げられていない。

例6 【遥控】毒梟～着他手下の喽罗／極悪人は手下の子分を陰で操っている。(p.1502)

辞書の用例はできるだけ常用語、易しい語を使うべきであろう。この語の場合、見出し語は間違いなく常用語であるが、用例の“毒梟”は、《現代汉语频率词典》(北京语言学院出版社 1986)にも入っておらず、常用語とは言えないだろう。学習者のための辞書の用例なら、このような言葉は避けたほうがよいと思われる。ついでに、この用例の日本語訳もぴったり合っているとは言えない。

例7 【候】老王请客，这桌菜钱他候了。(p.552)

“候”のこの用法は古い北京方言で、現在ではあまり使われないうで、多くの若い人はわからないだろう。《現漢》にも《规范》にも“候”のこの用法を収録していない。学習者のための辞書なら、方言を収録するかどうか、収録の場合どこまで収録してよいか、などのことを、辞書を編纂するに際して、明確に決めたほうがよいと思う。

3. 何のための用例か——検討してほしいところ2

3.1 見出し語のための用例かどうか

例8 【章】[量] 这只交响曲有四个乐～。(p.647)

“章”は間違いなく助数詞の用法を持っているが、この用例の“乐章”は全く違う助数詞である。

例9 【总是】[副] 真理～真理。(p.1731)

この用例の“总是”は一つの語ではない。この“总”は副詞、“是”は動詞で、“总是”はフレーズである。もしここの“总是”を一つの副詞と見なした場合、全文は「名詞+副詞+名詞」の構造になり、非文になってしまう。

例10 【报】[素] ～以热烈的掌声 (p.51)

ここの“报”は動詞であって、形態素ではない。中国語の「動詞+“以”+(連体修飾語+)名詞」は、日本語の「名詞をもって+動詞」にほぼ対応している。

例11 【畜】[素] 他太～了 (p.954)

ここの“畜”は述語の役割をしている形容詞であって、形態素ではない。

例12 【勉】②～强能容纳三个人 (p.470)

明らかにこの用例は“勉強”(子見出しのところにも出ている)の用例で、“勉”の用例にはならない。

3.2 見出し語の意味理解に役立つ用例かどうか

例13 【过】[動] (動詞の後に用い) 動作とともに物体が方向を変えることを表す。例 翻～三个跟头/とんぼ返りを3回する。(p.502)

ここでは、意味についての説明も正しく、用例も不自然な中国語ではない。しかし用例の“过”はただ「動作とともに物体が方向を変えること」ではない。“翻跟头”という動作自身は、ただ方向を変えることではなくて、とんぼ返りをしてから体が再び地面に立って、いわば元の方向に戻るのである。言い換えれば、この動作は体を360度回転させるのであって、結果として、方向は変わっていない。もし、“翻过一页”“回过头”(《现汉》例)、“侧

过身子”“把车头转过来”（《规范》例）、“掉过头来”“转过脸”（《应用》例）を使えば、“过”の意味理解にはプラスになるが、この用例は意味理解に役立つばかりでなく、「とんぼ返りを3回したことがある」という意味になってしまって、用例の“过”は違う用法である。

例14 【踏】[動] 脚～着祖国的大地，背负着人民的希望。一脚～在泥里。

把他打翻在地，再～上一只脚。脚～两只船。(p.1251)

動詞“踏”の「足で踏む、踏み付ける」という語釈の用例として、以上のように4つを挙げている。“脚踏着祖国的大地，背负着人民的希望”は“中国人民解放军进行曲”という歌の歌詞から引用したもので、ここの“踏”は比喩的な用法になる。“把他打翻在地，再踏上一只脚。”は60年代の半ばプロレタリア文化大革命時代に流行っていた言葉であり、立派な比喩的用法であって、“脚踏两只船”は慣用語で、もともと比喩的な用法である。つまり、この見出しの本来の意義を説明するものは、三番目の用例しかない。順序のことにも関連しているが、基本的意味を理解するのに役立つ用例をメインにしたほうが使用者に優しいだろう。

例15 【冲】 我有时说话太～／僕は時々激しい言葉使いをする。(p.251)

日本語訳だけを見てもそうであるが、この例は当該辞書 p. 250 I ①の語釈「激しい」の用例としては適切であるが、p. 251 II ②の語釈「(におい・気持ち・声が[この語釈自体も再検討したほうがよいと思われる—筆者]) 強い、きつい」の用例とされてしまっている。

例16 【专刊】[名] ① [期] (新聞・雑誌の) 特集号，特別欄。例 孙中山纪念～。清代文学～。② [本・份] 學術機関が特定の分野について編集・出版した學術誌・學術単行本。例 鲁迅研究～。纪念五四～。(p.1702)

ここでは語釈と用例を全文引用した。前の二例は、「(新聞・雑誌の) 特集号，特別欄」についての用例、後の二例は「學術誌・學術単行本」についての用例であるとみなしてもよいが、前後を入れ替えて、前の二例を「學術誌・學術単行本」についての用例、後の二例を「(新聞・雑誌の) 特集号，特別欄」についての用例と見なしても全然おかしくないのである。つまり、

用例は特定の意味記述についてのものには限定されていない。当然ながら、これは辞書使用者の意味理解には意味がないものとなり、場合によっては、マイナスの影響が生じるかもしれない。もし、前の用例を“今年第三期是孙中山纪念～”後の用例を“将研讨会上发表的优秀论文汇编成鲁迅研究～”にすれば、語釈の理解には助けになるだろう。

例17 【矮墩墩】号称“跳马王子”的楼云，长着一副～健壮的身躯。(p.3)。

辞書の用例としては短くはないと思うが、見出し語の意味理解にも、用法把握にもあまり意味がないようである。

3.3 見出し語の用法把握に役立つ用例かどうか

例18 【降水】〔動〕今年的～量较往年偏低。～概率。(p.651)

この見出し語は動詞として扱っているが、挙げられた用例は、二つとも独立している動詞の用例ではなく、動詞的形態素なのである。少なくとも“人工降水”(《规范》《现汉》例)のような用例を入れてほしい。

例19 【冷清】商店里顾客稀少，冷冷清清。对朋友不能冷冷清清，漠不关心。(p.665)

ここで挙げられた二つの用例は共に疊語の形を取っている。使用者はこれを読んで、この言葉は重なって使うべきだと理解してしまうかもしれない。この語を述語や連体修飾語として使う用例を補足したほうが無難であろう。

例20 【宣示】〔動〕～内外。～众人。(p.1255)

見出し語動詞「宣示」の後ろに続くものは何かというと、一つは何を示すかを表す内容で、もう一つは誰に示すかを表す対象である。Yahoo に出てくる用例を見てみたところ、内容を表すものが対象を表すものよりずっと多いようであった。この辞書の用例は二つとも対象を表すものであるので、少なくともその一つを、“宣示功德”(《应用》例)、“宣示政治主张”(《规范2》例)のようなものに変えてほしい。

例21 【狭窄】〔形〕①～的胡同。～的走廊。②心地～。见识～。(p.1401)

意味項目は二つに分けられているが、それぞれ二例ずつ挙げられている。前者の用例は二つとも連体修飾語の用例で、後者の用例は二つとも述語の

用例である。意味①の場合、主に連体修飾語に（ないしは連体修飾語に限って）、意味②の場合、主に述語に（ないしは述語に限って）使うと、使用者に誤解されるおそれがあるのではないだろうか。

例22 【烈】① [形素] 炽～。剧～。② [形素] 刚～。贞～。③ [名素] 功～。遺～。④ [名素] 英～。先～。(p. 850)

“烈”を使って語を構成することを考えてみたところ、③の場合、下位に位することがおそらく多いだろうが、これを除いては、形容詞の意味素にしても、名詞の意味素にしても、どの意味の場合でも、必ずしも下位に位するとは限らない。例えば、①“烈火”“烈酒”、②“烈性”“烈女”、④“烈士”“烈属”などよく使われる言葉が挙げられる。そのいくつかを差し替えると、“烈”を使って語を構成する時、下位にしか位することができないという誤解を避けられるであろう。

例23 【毕业】[動] 他～于北京大学。他的学习成绩太差，毕不了业。毕业典礼。(p. 55)

ここで挙げられた三つの用例は、それぞれ、“毕业于～”“毕得了业”“毕不了业”“毕业+～”の使い方を実証するもので大変良いと思われる。だが、日本人学習者がよく行う“他毕业北京大学”という間違いを防ぐため、“他北京大学毕业”のような用例を入れると、もっと役に立つはずだ。

例24 【实足】“～十岁”“～一百人”“这袋大米～二百斤”(p. 1330)

三つの用例は、例外なく数量詞に使うもので、この言葉はほかの用法がないと理解されるおそれがある。“实足年齢”“实足+动词”などの用例を入れたほうがもっと穏当であろう。

例25 【果然】[接] もし、果たして…なら：多く“就”と呼応する。例 你～愿意参加，我们非常欢迎／あなたがもし参加したいのならわたしたちは大歓迎だ。(p. 501)

この見出しについての用法説明も重要で、挙げられた用例も正確で自然な文章である。しかし、この用例はそのすぐ前の説明と合うものではない。「多く“就”と呼応する」という説明をせっかく付けたものの、用例は“就”を使っていないものである。少なくとも“就”と呼応する用例を補足した

い。もし、紙幅の関係で用例は一つしか挙げられないならば、やはり説明と呼応するものを挙げた方が使用者により優しいであろう。

3.4 見出し語の色彩体得に役立つ用例かどうか

例26 【烈士】[名] ①烈士、壮士。世のために功績を立てようとした人。

例～暮年、壮心不已。②革命～。～纪念碑。(p. 851)

ここで並列されている二つの意味項目は、文体的には異なっている。①は古語で、②は現代語である。①については、《現漢》では、はっきり「(书)」と、《规范》では、明確に「〈文〉」と書き表されている。《应用》では、文体についての略称説明を付けていないが、“古代指积极建功立业的人”のように記述してある。一方、ここではなんの説明もされていない。

例27 【笄】[名素] 年将及笄／女子が年頃になる。(p. 602)

“笄”という言葉は現代中国語ではあまり使わないものであって、書面語(あるいは古語)というような説明が必要であろう。

例28 【费时】[動] 这活很～。 (p. 304)

“这活”は口頭語であるが、“费时”は文章に使う言葉になる。この用例自体はすこし不自然な感じがある。

例29 【鄙夷】[動] 〈文〉我没有～你的意思。(p. 54)

用例自体は話し言葉なのであるが、“鄙夷”という文章語が入っている。

4. 効果的な用例か——検討してほしいところ3

4.1 この用例だけで完全に意味・用法を理解できるか

例30 【价】震天价响。(p. 555)

この場合、“震天价响”の形にしか使わないだろう。“响”がなければ、“震天价”だけをどう使うかわからなくなってしまうので、用例としての意味を失ってしまう。《現漢》《规范》《应用》などを調べてみたら、どれも“震天价响”を挙げていて、“震天价”だけを挙げる辞書は一冊もなかった。

例31 【堡垒】[名] 科学～。 (p. 51)

確かに“科学堡垒”はよく見られる組み合わせであるが、しかし、普通“攻克”“拿下”などの動詞の目的語に使われるのである。この場合、動詞も同時に出したほうが使用者に親切であろう。

例32 【暗含】～着。(p.8)

このような用例は、せいぜい見出し語の動詞が、後ろに“着”が付けられることを語っている。動詞自身の用法については、この用例では一切示していない。

例33 【客观】～上。(p.962)

“客观上”は確かによく使うものであるが、この場合の“上”は、接尾語的な名詞で、多くの名詞に付けられて、“主观上”“事实上”“思想上”“组织上”など挙げれば限りないほどある。これだけでは、十分にこの語の用法を解釈できるとは言えないであろう。

4.2 不必要な情報が有りすぎないか

例34 【单位】他被铁道部所属几个～踢来踢去好几次，最后才被安排到一个修配厂。(p.350)

「部門」「組織」の意味の用例なら、簡単でわかりやすい用例をいくつも挙げられるが、こんなに長い文の場合は、不必要な情報がありすぎて、見出し語の理解にはかえって不利ではないだろうか。少なくとも用例としては効果的ではないと言えるだろう。

例35 【力争】一切共产主义者的最后目的，则是在于～社会主义社会和共产主义社会的最后实现。(p.1044)

“力争”の使い方について用例を挙げる場合、一つは“力争+動詞+目的語”、もう一つは“据理力争”のような目的語のいらぬもの、この二つで十分だと思う。この辞書の用例は、“力争”の意味や用法を理解するのに不必要なものが多過ぎると思う。

例36 【不显山，不露水】搭致得～，满好。(p.101)

“搭致”という言葉は、当該辞書に収録されていないばかりか、《现汉5》《现汉6》《规范1》《规范2》《应用》のどの辞書にも収録してないものであ

る。あまり常用されていない、難しすぎる言葉を用いた用例は使用者には不便である。

例37 【搬弄是非】他老是爱调三斡四地～。(p.50)

“调三斡四”という言葉は“调三窝四”の形で使うことが一般的である。当該辞書でも“调三窝四”を見出し語にして、その語釈の中に「“调三斡四”ともいう」の形で一筆書いてある。《现汉5》《现汉6》の扱い方もこれと同じである。一方、“调三斡四”も“调三窝四”も《规范1》《规范2》《应用》に収録されていない。このような、用例の言葉の使い方はもう少し検討してほしい。

4.3 簡単な重複にならないか

例38 【从中】～撮合／仲をとりもつ。没有介绍人～撮合／仲をとりもつ紹介者がいない。(p.127)

連続して挙げられた用例であるが、後者の中に前者を含めているから、二つの用例を挙げる必要がなくなる。

5. 規範的な用例か——検討してほしいところ4

5.1 ごく単純な間違い

例39 【征婚】[動]～启示。(p.1652)

“启示”は“启事”の間違いだということは明らかである。書き間違いだろうと思うが、辞書にとっては、これも絶対許されないものと思われる。

例40 【大作】～已拜读，获益非浅。(p.252)

正しい書き方は“获益匪浅”である。意味的には通じると思われるが、決まった書き方があるから、間違えるべきではない。

例41 【哪们子】我们从来不相认，你跟我～亲。(p.952)

もしかしたら、この用例は《应用》(p.895)の用例を書き直したものかもしれない。二者の違うところは一箇所だけで、《应用》(p.895)の用例は“相认”ではなくて“相识”である。つまり、書き直す際、“相识”を“相认”

に直した。しかし、この文では、“相识”を使わなければならないのである。“相认”は“亲友在失散或中断联系多年后重新认定关系”《规范2》(p. 1431)という意味である。これだけ見ても“相认”を使つてはいけなことがわかるであろう。

例42 【深】②一往～情。(p. 614)

“一往”は「最初からずっと」の意味で、その後は動詞や、「動詞+目的語」、あるいは「主語+述語」などの連語が来るはずである。普通は“一往情深”であつて、《现汉》《规范》《应用》などの辞書はどれも、“一往情深”を見出し語にしている。どうしても“深情”という名詞を使うなら、“一往有深情”と言うべきであろう。

例43 【张望】[動] 他四顾～, 什么都没发现。(p. 649)

“顾”と“张望”は同じ意味であるから、語義重複になってしまう。“四顾张望”と言うべきであろう。

例44 【抽搐】抽抽搐搐。(p. 251)

見出し語の“抽搐”は、普通疊語の形を取らないようである。ネットで調べたところ、ある小説に一例が出てきたが、その場合は“抽抽搭搭”を使うのが一般的であるから、誤植かもしれない。

例45 【拧】二声 níng ①～毛巾。②～了他一把。三声 nǐng ①“～毛巾”
③“～了一把”。(p. 502)

ここの語釈と用例によれば、“拧毛巾”“拧了一把”の“拧”は二声で言つても、三声で言つてもよいという結論になるため、使用者はこれを読んだら、きつと迷つてしまうであろう。実のところ、どちらも二声で言うべきであつて、三声の言い方は間違いである。《现汉》《规范》《应用》の語釈と用例を読めばわかるはずである。

例46 【后手】办事要有始有终, 不允许有前手, 没有～。(p. 551)

“有前手”と“没有后手”の間に間を入れてはいけなので、コンマがあつてはいけな。あるいはこの用例は《应用》の用例を参考にして書いたものかもしれないが、《应用》の用例は“有前手没有后手”であつて、正しいのである。

5.2 意味から見て組み合わせがおかしい

例47 【有頼】…に頼る。…いかんにかかっている。这件事能否成功，有頼于大家的努力／このことが成功するか否かは、皆さんの努力いかんにかかっている。(p.958)

日本語に訳す場合、確かに「……いかんにかかっている」と訳す場合が多くて、意味もニュアンスも合っている。しかし、“能否成功”は成功するか成功しないかという意味であって、成功したら、「皆さんの努力に頼って成功できた」と言えるが、成功しなかったら、「皆さんの努力に頼って出た結果」と言ったら皮肉になるだろう。みんなの努力が足りないから成功できなかった、というのが本来の筋だと思うので、用例の“能否”を“能够”にして、訳文を「このことが成功できたのは皆さんの努力のおかげだ」とすると正しくなる。訳文はそのままの場合、“有頼于大家的努力”を“取决于大家的努力程度”に直すべきで、“有頼”の用例には使えなくなってしまう。

例48 【严厉】冬天很～／冬は大変厳しい。(p.906)

“严厉”は“严肃而厉害”という意味で、“严厉的冬天”も“冬天很严厉”も普通使わない表現である。用例の日本語からすると、中国語は“冬天冷得厉害”“冬天非常冷”となるであろう。

例49 【操纵】〔動〕你无权～他人的思想。(p.104)

“思想”を目的語にする場合、あまり“操纵”を述語にすることはないだろう。

例50 【担待】你要是出不起花销，我来替你～一两年。(p.351)

この用例では“出花销”と“担待”二箇所の用法は不自然ではないかと思われる。まず、名詞としての“花销”が目的語になることはめったにないようである。“出花销”という組み合わせはなおさらおかしいと思われる。“担待”の使い方も現代中国語の常用で、規範的な使い方とは言えないと思う。

5.3 語順を再検討してほしい

例51 【改】～晚乘车。(p.551)

“改乘晚一些的车”“改乘晚班车”“改乘晚上的车”などは自然な中国語である。なぜかというのと、「やり直す」ことは「乗る」ことで、「遅い」はどん

な交通工具かを限定するものである。“改”を“晚”の直前に置くことは不自然である。

例52 【寿比南山】〔成語〕祝您～，福如东海。(p.1016)

“福如东海，寿比南山”は、決まった文句で、順序も決まっている。この言葉を入れた“对联”も“福如东海长流水，寿比南山不老松”となって、同じ順序になっている。音声的にこの順序でないと、抑揚が不自然になる。

5.4 虚詞の使い方に問題がある

例53 【哪怕】她每天都去图书馆，～看杂志／彼女は毎日図書館へ行く。
たとえ雑誌を見るだけでも。(p.952)

“哪怕”は仮定、譲歩を表すもので、この文の“看杂志”だけではこのようなニュアンスを表すことはできない。後半を“只是看看杂志”にしたほうが良いだろう。

例54 【就是】たとえば、よしんば ～他叫我去我不肯去／彼はわたしに行けといってもわたしは行かぬ。(p.427)

ここの“就是”は譲歩を表すもので、後半は“也”“都”の言葉で呼応する場合が多い。もし後半が反語文ならば、“也”“都”の言葉は出てこない。そのため、この例文の“我不肯去”は“我也不去”“我都不去”“我能去吗？”などにしたほうが穏当であろう。

例55 【多】今年比去年热(得)多。(p.450)

“得”はなければいけないものであるが、当該辞書では、“热(得)多”の形をしている。これは“热得多”“热多”のどちらでも言うことが可能という意味になるが、間違っている。もし“热得多”のかわりに“热多了”とも言えるというような説明を付ければ、問題はなくなるであろう。

例56 【挣脱】从贫困～／貧困から脱け出す。(p.762)

“从贫困”は“从贫困中”にするべきであろう。“贫困”は“挣脱”しようとする環境、状態だからである。

例57 【省悟】〔動〕了解到他的真实面目，大家都～。(p.1002)

“了解到他的真实面目”は前提で、その後ろに来るのは変化の結果か出現

可能の状態である。前者の場合“～了”、後者の場合は“都会省悟(的)”となる。

例58 【过磅】过磅称一称，二百斤／台ばかりにかけて量って見たら100キロだった。(p.502)

“过磅称一称”はこれからこの動作をすることを表すものであるが、この用例では既にこの動作の結果が出てきているので、この動作が既に行われたことははっきりしている。日本語訳文を見てもわかるが、“过磅称了称”や“过磅称了一称”などのように直さなくてはならない。

例59 【仁至义尽】对待犯错误的人，他总是关心、帮助、做到～了／重罪を犯したものに対して、彼はいつも優しく援助して、できる限りの心配りをする。(p.1101)

文中に“总是”が入っているから、慣習的な動作を行っていることがわかる。過去完成でも、状態変化でもないのので、文末に“了”は使うべきではない。あるいはこの用例は《应用》を参考にして書いたものかもしれないが、調べたところ、《应用》ではこの用例に“了”は使っていないのである。

例60 【认】他们～出是我来，全围上来。(p.1102)

コンマの前と後は、順序の関係があって、次第に発生することである。もし、前者がまだ発生していないなら、当然後者も発生していないから、“会全围上来(的)”と言うのが自然である。一方、前者が既に発生していて、後者も発生しているなら、“全围了上来”か“全围上来了”と言ったほうが妥当であろう。どちらでも良いが、今のままでは、少し問題がある。

5.5 文(語句) そのもの自体が不自然かおかしい

例61 【AA制】[名] 只两个人去吃没意思，便邀他们AA制吧／2人だけで食べに行っても面白くないから、彼らも誘ってみんなで割り勘といこう。(p.1)

“便”は副詞で、“就”と似ているが、主に文章語に使う。この用例では、やはり“就”を使ったほうが自然であろう。これよりもっと不自然なのは“邀他们AA制吧”だと思う。“便邀他们AA制吧”を“邀上他们，咱们AA

制吧”とすれば自然な文になる。“便”（文体のことを考えると“就”のほうがもっと良いが）を使って“便邀了他们”としても言えるが、肝心な見出し語“AA制”は使えなくなった。

例62 【加】～一句话；～上话。（p.108）

“加上一句话”“加上句话”などは普通に使えるが、“加上话”だけは言わないであろう。

例63 【嫁】～出女儿泼去水。（p.114）

“嫁出去的儿女泼出去的水”はよく使われているもので、「嫁に行った娘はまさに撒いた水と同じように、もう自分と全然関係ない」という意味であるから、喩えられるものも、喩えるものも名詞である。この用例は、二つの「動詞＋方向補語＋目的語」から出来た動詞的連語の並列になり、二者の関係もわからなくなってしまう。普通は使わない言い方であろう。

例64 【该死】～，～，又把钥匙丢在家里了。（p.551）

“丢”よりは“落la”あるいは“忘”を使ったほうが一般的だと思われる。この場合“丢”を使う人もいるようではあるが、それは方言の影響だと思う。辞書の用例としては方言の使用は避けた方が良いでしょう。

6. 正確な訳が付いている用例か——検討してほしいところ5

6.1 単純な誤訳

例65 【后头】大头在～／残り物には福がある。（p.326）

“大头在后头”は“老鼠拖木锨——大头在后头”という“歇后语”の後半で、「より大きな（より重要な、より深刻な）ことがこれから来るよ」という意味であって、訳文は間違っている。

例66 【有上顿没下顿】二妹妹也的确是可怜，～的／二妹妹もたしかに気の毒だ。お先真っ暗なのだ。（p.957）

“吃了上顿没下顿”とも言って、「今回の食事はなんとか済ませせるとしても、次の食事は断つだろう」という意味で、一日三食さえ保証できない貧乏な生活を言うものであって、訳文後半の言っていることと違っている。な

お、これを見出し語にしてよいかについても、疑問を持っている。

6.2 用例訳文の意味が原文より曖昧なもの

例67 【有鬼】你～／とんでもない。(p.956)

《应用》(p. 1529)も《规范2》(p. 1598)も語釈が似ているが、《规范2》によれば、“有鬼”は“比喻有不可告人的打算或阴谋”になって、この訳は「下心があるんじゃない」の方がよさそうである。

例68 【果儿】汤里卧个～／スープに卵を落とす。煮挂面甩个～／うどんに卵を落とす。(p.501)

ここでは用例を二つ挙げている、中国語の原文では見出し語の“果儿”を目的語にして、述語はそれぞれ“卧”“甩”にしているのであるが、日本語訳文を見てみると、同じ動詞「落とす」を使っていて、“卧”と“甩”は同じことを言っているように見える。だが、同じ「落とす」でも、“卧”の場合は「掻き混ぜないで落とす」ことを指し、“甩”の場合は「かき混ぜてから、流すようにする」ことを指すのである。ちなみに、この見出し語“果儿”は、昔の北京語口頭語ではあるが、最近ではほとんど使われなくなってきている。調べたところ、《现汉》《规范》にも、《现代北京口语词典》(陈刚等, 语文出版社, 1997.1, p.140)、《北京话词语》(傅民等, 北京大学出版社, 1986.8, p.100)、《北京话语词汇释》(宋孝才, 北京语言学院出版社, 1987.1, p.259)、《北京土语词典》(徐世荣, 北京出版社, 1990.4, p.163)、《中国民间方言辞典》(段开琏, 南海出版公司, 1994.3, p.215)、《汉语方言常用词词典》(闵家骥等, 浙江教育出版社, 1991.5, p.200)にも収録されていない。

6.3 用例訳文の意味が原文より広いもの

例69 【遥控】毒梟～着他手下的小喽罗／極悪人は手下の子分を陰で操っている。(p.1502)

“毒梟”は「極悪人」と言えば「極悪人」であるが、麻薬販売のボスだけ指しており、その意味は「極悪人」の範囲よりずっと狭い。

例70 【交叉】～的意见／重複する意見。(p.652)

ここの訳によれば、“交叉”と「重複する」は同じ意味になるが、実は異なる。“交叉”は「接点がある」を表して、「重複」は「同じ物事が重なる」を意味する。そのため、この訳は「部分的に重複した意見」「重複したところもある意見」にしたほうが妥当であろう。

6.4 用例訳文の意味が原文より狭いもの

例71 【卖淫】禁止～嫖娼／買春を禁止する。(p.894)

「買春」は「嫖娼」と対応しているが、“卖淫”は訳されていない。ここの訳は「売春買春を禁止する」とすべきである。

例72 【借】～书／本を貸し出す。(p.554)

「本を貸し出す」も「本を借りる」も、両方とも“借书”になる。まさに中国語と日本語の違いところで、また日本人学者の注意すべきところである。このようなところでは、「①本を貸し出す。②本を借りる。」と書いたほうが良いだろう。

6.5 ヴォイス・テンス、アスペクトについての誤訳

例73 【碴】让碎玻璃碴了一道口子／ガラスの破片で切ってしまった。(p.151)

受身文を主動文に訳すことや主動文を受身文に訳すことは、もちろんよくあることで、それは翻訳や通訳のテクニックの一つと見られている。しかし、それは、そのようにすべき場合は限られていて、すべてをそのように扱うことはないのである。場合によってはそうしてはいけないこともある。ここの用例では、原文は受身文で、不注意でそのような「損」をしたというニュアンスで言ったものであるが、訳文は主動文にしてしまって、意識的にそういう動作をしたというニュアンスになってしまい、間違いとなる。やはり「ガラスの破片に切られてしまった」と訳したほうが適切であろう。

例74 【迎头痛击】给侵略者以～／侵入者に真正面から一撃を食らわせた。(p.1552)

この用例は決意を言い表すときに用いる文で、過去のことと理解してはい

けない。しかし、訳文は過去の形にされている。もし、本当に過去のことを述べるのであれば、“给予了侵略者以迎头痛击”と言うべきであろう。

例75 【捧】多亏诸位～我／皆様のご援助（同情）を得て実にありがたい。
(p.737)

“多亏诸位”と言ったら、「皆様のおかげで」の意味だから、当然ながらその後ろに「なにになにが出来た」「なにになにに成功した」あるいは「なにになにを免れた」「なにになにから守られた」のような部分が出てくる。用例自体は後半が出てこない、使用者には簡単に理解してもらえないかもしれない。たとえ後半が出てこなくても、「実にありがたい」という訳は正しい訳とは言えない。

例76 【架】被土匪给～了去／土匪にとりこにされた。(p.113)

“被土匪给架了去”という中国語は、自然な文章である。しかし、ここの“了”は“架”という動作の完成を表すが、必ずしも過去とは限らない。例えば“你得特别小心，留神被土匪给架了去”と言う場合、事前に注意することで、過去のことはない。一方、日本語訳は「とりこにされた」になるから、過去のことは言うまでもないのである。ここの日本語をそのままに訳すと、中国語“被土匪给架了去”の後ろに“了”を入れなければならないだろう。

7. 辞書編纂者への期待

辞書編纂に際し、用例のことについては、辞書編纂者に次のことを頭に置いていただきたい。

(1) 日本人のためか中国人のためか、学習者のためか研究者のためか、読解のためか作文表現のためか、要するにどのような読者のための辞書かを前もって決めること。誰でも使える辞書は結果としては誰もが満足できないものになるかもしれない。

(2) 用例を出す前に、これは何のための用例かということをよく考えること。そして、用例を書き終わったら、設定した目的に合致するか、使用者

に役立つかなどをもう一度検討すること。目的に合わない用例、使用者に役立たない用例は削除すべきである。

(3) 辞書は、限られた紙幅で、できるだけ多くの情報を提供しなければならないものだから、すべての用例は効果的でなければならない。辞書使用者の要望に応えられない用例、辞書使用者の勉強研究に役立たない用例はもちろんあってはならない。一方、有りすぎる情報、長すぎる文章は、見出し語の意味・用法への理解の邪魔になるおそれがあるから、避けたほうがよい。

(4) 辞書は「典」であるから、辞書に載った用例は、模範文でなければならない。言葉の使い方、文章の組み立て方、使用場面の設定、全て規範的なものでなければならないはずである。

(5) 対訳辞典の場合、どのように訳すのかも慎重に考えてほしい。辞書使用者にただ一つの訳文を通して、見出し語の意味、用法、ニュアンスを正確に把握してもらうことは、編纂に携わってきたものとして決して安易なことではないとよく承知している。だが、そのように期待するのは、すべての辞書使用者の本音であろう。

筆者も辞書編纂の仕事に多少携わったことがあるが、自身を振り返り、以上のことについての配慮が足りないばかりでなく、編纂するにあたり前もってこれらのことを考えるべきだったと後悔している。今になってみて、至らない部分がかかなりあったという思いで一杯である。

8. 辞書使用者に考えてほしいこと

本研究は辞書用例の問題点をまとめたものであるから、辞書の用例は問題が多くて信用できないと、辞書使用者は思うかもしれない。実のところ、そうとは言い切れない。本研究の調査では、ほとんどの辞書に、用例についても少し検討してほしいところがあった。だが、該当辞書の全用例から見て、ほんの一部であり、それは個別のものにしか過ぎない。辞書の用例の9割以上は、正確で、役立つものだと思う。辞書を利用するとき、語釈、訳語

しか読まず、説明や用例を無視する習慣があるならば、その習慣を改めたほうがよいと皆さんに申し上げたい。辞書自体に問題や間違いが多いのではとそれでもまだ不安が残るならば、同時に複数の辞書を使い、確認をしてほしい。そういった過程の中でよりよい用例を覚えていくことは今後非常にプラスになっていくはずである。

終わりに

本研究では、辞書用例についていくつか観点を出したが、これは全てではない。例えば、用例の必要性、用例の数量、複数用例の前後順序など、これから考えていくべきことがまだまだ挙げられるが、それらは今後の課題としたい。

追記：本研究の中間報告として「対訳辞書の例を考える」の題で、2007年度の日本中国学会東海支部年会で発表させていただきました。その際、愛知大学の荒川清秀教授をはじめ方々のご指摘およびご意見を頂戴しました。この場をお借りしまして感謝の意を表します。

顧明耀 Gu Mingyao 西安交通大学城市学院外国語学部教授、愛知大学中日大辞典編纂所研究員、県立広島女子大学名誉教授 専門：対照言語学（日中）、辞書学
E-mail: gumingyaoxian@gmail.com